

生長の家の教えと実践 - 1 -

ここでしばらく、生長の家の教えと実践について省察することにしよう。同教団がなぜブラジルの非日系人の間で広がりやすかったのか、その理由を探るのが目的である。

(1) 教団の成立と目的

1929年(昭和4年)12月13日、創始者谷口雅春は現神戸市にある住吉神社に日参しながら日本国家繁栄のための祈りを捧げていた。その時、「生命の実相を知れ」「人間・神の子」「今即久遠」「天地一切のものと和解せよ」との神の啓示・靈感を授かった。彼は、翌年3月1日、『生長の家』という月刊誌を創刊する。この日は生長の家の立教の日になっている。同教団は、人間は谷口の啓示に現れた真理を認知して習得し、真理の世界としての「実相世界」を生きるべきであると説く。それは、万物が既に神的世界のなかに生かされ生きており、「神そのもの」としての完全性に満ち満ちている世界である。

いずれ「新宗教の生命主義」について述べることにしたいが、生長の家においても「生命主義」の思想は顕著で、直覚的認識による人間と神の合一(「人間・神の子」)、天地一切のものとの連続性(「天地一切のものと和解せよ」)などの主張はそれを如実に表している。このような信仰を实践する活動は、生長の家において「人類光明化運動」と呼ばれる。

谷口は、『生命の実相』という40巻もの膨大な量の教義書のなかで、彼が把握した宗教的真理を体系的にまとめている。教団の多くの出版物は彼の著作を包括的かつ体系的に記述しているものが多い。同教団では、それらの著作を読み、谷口の思想を学ぶなかに信仰が深まるという信念がある。それゆえ、ブラジルでも生長の家の熱心な信者は、出版物で教義を自学自習し、教化部(Regional)と呼ばれる拠点で行われる集会に参加して、自らの悟りを互いに披露しあっている。誰からも強要されることなく自主的に学ぶ姿勢が尊重され、得たものを自由に他者に伝えることができるという生長の家の信者育成スタイルは、ブラジル人気質に受け入れられやすいといえよう。

(2) 教えの源泉

大本教の知識人の一人だった谷口は、同教団が説く「万教帰一」「万教同根」の思想の影響を非常に強く受け、それらを生長の家の教えに生かしている。生長の家のマークには、神道を表現した日章旗、仏教を表現した卍、キリスト教を表現した十字が混成され、万教の教えの真髄に流れる本源の教えを説くとされる。



ブラジル生長の家のホームページより

「自然と調和して生きるための幸せな方法」と書かれている。

生長の家は、戦後「生長の家教団」という名称で新日本宗教団体

連合会(新宗連)に加入していた。しかし、いかなる宗派にも属さず、あらゆる宗教の真髄が一つであることを表明するために連盟を脱会したとされる。その際に、谷口は次のように述べている。

生長の家は、万教の真髄は唯一の「真理」であって、その説き方が異なるのは宗祖出現の時代環境、宗祖の人格、そ

れに伴って集まってきた高弟達によって醸し出された宗風と云ふものによって、賦彩^{いろづき}されてあるだけであると云ふので「万教帰一」の旗印をかかげて、或時には仏教経典を説き、ある時にはキリスト教聖書を説き、ある時には古事記にのっとって神道を説き、ある時には天理教の教へを、ある時には金光教祖の教へを説いて、その真髄の一致してゐるところを示してどの教派にも属しないで、一切宗教の総合帰一体系をとってゐたのである(生長の家ラテンアメリカ伝道本部 1973: 40~41頁、『円環』昭和32年7月1日号)。

生長の家にとって、人類光明化運動の主宰神は「住吉大神」であり、かつ久遠のキリストとも観世音菩薩とも一体なる神であり、大生命と見做される神という究極の根源において、それらは融和しているという。観世音菩薩の功德は、『法華経』の「普門品第二十五」に書かれてあり、「普門」とは「遍く門」すなわち「あらゆる宗門」を意味するから観世音菩薩はあらゆる宗門を遍く成就する仏であるとされ、普門成就のキリスト教にも神道にも示現して救いを垂れているのだとする。

このようなシンクレティズムへの指向性は大本教から引き継がれたものである。生長の家では他宗派との組織的な協力に向かうというよりも、他宗派の教えを積極的に取り込む思想的な包容力や、会員に宗旨変えを要求しない寛容さになった。

大本教からは数多くの宗教教団が生まれた。それらは、政府によって弾圧が加えられた二つの大本事件(第一次[1920年]、第二次[1935年])がきっかけで分派した。対馬らは、それらの分派教団を次の5つのタイプに分けている。①心靈研究・心靈主義を中心とする教団・団体、②鎮魂帰神を中心とする霊術の実践を専らとする教団、③何らかの神示を中心に据え、神による立て替え立て直しを主張する教団、④万教帰一的、万教同根的な世界宗教一致への道を説く教団、⑤古神道の教義と実践を標榜する教団(対馬・津城 1994: 75)。むろん、一つの教団でもこれらの特徴をいくつか持っていることが多い。例えば生長の家は④に該当するが、霊界の思想を説き(①)、日常の信仰生活では神想観という鎮魂帰神法の影響を受けた儀礼の実践が強調されている(②)。

いささか性急にみえるが、日本の新宗教の中で生長の家が非日系ブラジル人にもっとも受容されている背景の一つには、こうしたシンクレティックな教義の体系化と、そこから導かれる他宗教にたいする寛容さがあるといえよう。特にブラジルでは、谷口の視点による聖書解釈こそが「真のキリスト教」だと強調するため、生長の家はキリスト教の新たな一派とされることがある。キリスト教信者であっても生長の家での活動が許されるのは当然で、生長の家のメンバーになることが「真のキリスト教信者」になれるとさえ理解されている。信仰の深まった信者らは「生長の家信者」だと名乗るが、多くの場合は生長の家で信仰熱心になり、同教団の宗教的コンテキストにおける「キリスト教信者」として活動しているのである。

【参考文献】

対馬路人・津城寛文「大本の影響」『新宗教事典 本文篇』弘文堂、1994年、74~80頁。